様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２５０６
研究種目：研究活動スタート支援
研究期間：2019～2023
課題番号：１９Ｋ２３０８１

研究課題名（和文）「モツ」動作を表す中国語動詞に対するビデオを用いた意味研究

研究課題名（英文）A Study of Chinese Action Verbs that Mean 'to Holding' Object Based on the Analysis of Video Recognition

研究代表者
中司　梢（Nakatsuka, Kozue）

麗澤大学・外国語学部・助教

研究者番号：５０８４４５９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は「モツ」動作を表す中国語動作動詞の意味についてビデオを用いて分析するものである。母語話者へ調査を行い、そこから得られたビデオデータを分析することで各動詞の動作の形を明らかにしてきた。特に中国語の基本動詞na2について調査するとともに、日本語の動詞である「持つ」「取る」についても調査した。その結果、各動詞が表す動作にはバリエーションが見られ、かつ多くのインフォーマントに共通する動作、すなわち典型動作を確認した。さらに各動詞が表す中心的意味・周辺的意味およびそれらの関係を明らかにし、各動作の動詞の形を考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の調査方法および分析方法は中国語のみならず他の言語にも応用することが可能であると思われる。したがって本研究で用いた方法を他の言語に応用させて、中国語と他の言語の動作動詞を比較することができる。また分析対象とする言語を拡大していけば、たとえば物体の把握を表す動詞の多寡やそれらの関係など個別の言語の特徴、あるいは世界の言語に普遍的な特徴なども明らかにすることができるであろう。その意味で本研究は対照言語学的、類型論的な発展を期待できるものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study uses video to analyze the meaning of Chinese action verbs for the "hold" action. By conducting a survey of native speakers and analyzing the video data obtained from the survey, we have clarified the form of the action of each verb. In particular, the basic Chinese verb na2 was investigated, as well as the Japanese verbs motsu" and "toru. As a result, we found variations in the actions expressed by each verb, and identified actions common to many informants, i.e., typical actions. The central and peripheral meanings expressed by each verb and the relationship between them were also clarified, and the verb forms of each action were discussed.

研究分野：中国語学

キーワード：意味研究　動作動詞　ビデオ分析　日中対照

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

人間が行う動作の中でも特に多様性を持つのが手の動作である。それを反映するように、中国語動作動詞の中でも手に関わる動作動詞は手以外の身体部位による動作動詞に比べて数多く存在し、また常用される。中国語の動詞の一般的な特徴として、動作の形によってどの動詞を用いるか細かく分かれるということが挙げられる。その典型が手に関わる動作動詞であり、特に「モツ」動作を表す動詞は“拿、抓、揪、握、攥、托、捧、端、持、把、操、执、抄、提、拎、抬、举、擎、搂、抱”など数多く存在する。それらの各動詞の動作の形は異なりつつも共通する部分もみられ、複雑な関係を有していると思われる。

従来、中国語の手に関する動作動詞の意味について個別的に論じた研究が見られる。しかし、それらの研究は目的語や補語といった共起要素、また文型からの考察が主であり、動詞が表す動作の形に必ずしも迫っていないという課題がある。また、動作動詞の意味体系を十分に示したものは管見の限りまだない。

本研究はビデオを用いた手法によって動詞が表す動作の形を明らかにし、さらに動作を身体的な基準に即して分析する。これによって、各動詞が示す動作の異同が客観的な形で可視化され、その結果、動詞の意味を明確に示すことが可能になると考えられる。さらに、本研究の手法を「モツ」動作を表す日本語動詞に応用し、日中対照比較も併せて行う。

２．研究の目的

手に関わる中国語動作動詞の意味研究の一環として、本研究は「モツ」動作を表す中国語動作動詞を対象とする。従来の研究が目的語や補語等の共起要素の影響を受けざるを得なかったのに対し、本研究はビデオを用いた手法によって動詞が表す動作の形を明らかにし、さらにロボット工学や手話、作業療法など他分野の研究成果を援用し、動作を身体的な基準に即して分析することで、各動詞が示す動作の異同を客観的な形で可視化し、動詞の意味を明確に示すことを目的とする。

本研究ではさらに手に関わる中国語動作動詞と日本語動作動詞と対照する。動詞が表す動作を人類に一般的に共通する身体という基準で比較することで、中国語動作動詞の意味をより厳密に記述することが可能になると考えられる。このような方法の有効性を示し研究方法として確立することも手に関わる動作動詞の意味を体系的にとらえようとする本研究の大きな目的の一つである。

本研究が進展すれば、言語を超えた身体という基準を用いる本研究の方法を将来的に他言語にも応用することができると期待され、独創的なものだと考えられる。

３．研究の方法

研究方法については、母語話者へ調査を行い、そこから得られたビデオデータを分析することで各動詞の動作の形を明らかにする。調査には二段階あり、第一の調査では複数の中国語母語話者（北方出身者に限定）に、周囲の物体が視界に入らないよう設定した環境で文字（例えば“拿”）を見せてそれが表す動作を身体を用いて表現してもらう。

複数のインフォーマントに調査を行うため、動作にはバリエーションが見られることが予想される（当然、動詞によってはバリエーションがない可能性も想定される）。さらに一つの動詞に複数の動作が示されるとしても、多くのインフォーマントに共通する動作が存在することも考えられる。これが典型動作であり、その動作こそ対象の動詞の中心的な意味である。そして、

各々の動詞の動作の形を身体という基準に即して分析、比較し、典型動作の形によって決定される動詞の中心的な意味を明確にする。その具体的な基準は、例えば指の状態に関して言えば、手の三つの関節運動①屈折・伸展、②内転・外転、③拇指の対立・復位である。

第二の調査では、第一の調査には参加していない複数の母語話者（北方出身者）に対して典型動作を含む各動詞が表す様々な動作のビデオを見せ、“普通话”（中国語の標準語）の基準に即して、よりその動詞らしい動作かどうか、その程度を評価するよう求める。このような方法を用いるのは、第一の調査で得られた結果を再検証するとともに、各動詞が表す中心的意味・周辺的意味およびそれらの関係を明らかにするためである。なお、第二の調査では動作の自然さのために物体を用いるが、物体が何であるかが調査結果に及ぼす影響をできるだけ排除するために、一見して何かわかりにくい複数の異なる物体を用いた動作ビデオを作成し、インフォ―マントにすべて評価するよう求める。さらに、調査の信頼性を確保するために、同一のインフォーマントに対して同一の課題を複数回課す。

本研究の手法を「モツ」動作を表す日本語動詞に応用し、同様の調査を日本語母語話者に対して日本語動詞「持つ、取る」等について行い、日中対照比較も併せて行う。

４．研究成果

本研究は上述の研究目的および研究方法に基づいて、研究実施期間にデータの収集・整理を行った。ただし、当初予定していた第一の調査についてはコロナウィルス流行のため対面調査が困難となり、全ての調査がオンラインとならざるを得ず、第二の調査を主として行った。また、これらのデータに対する分析・考察を通じて、新たな知見・今後の研究に対する見通しを得ることができた。『“拿”とは何か ―― ビデオ評価による“拿”の中心的・周辺的意味』(2019)では、動作動詞“拿”の中心的意味および周辺的意味を検討するにあたり、複数の母語話者に調査を行い、“拿”に関する４種類のビデオ―「引き寄せ」、「持ち上げ」、「保持」、「引き寄せ＋移動」―を見せ、より“拿”らしいものはどれか、その典型性を評価するよう求めた。調査結果の分析・考察を通して、“拿”の取得義、保持義、移動義について以下のように結論される。

“拿”は動作動詞としての性質が強く、その中心的意味は取得義である。一概に取得といっても本調査では「持ち上げ」のビデオより「引き寄せ」のビデオのほうがより“拿”らしいと評価されたことから、“拿”の典型動作は物体を手中に収めたのち、自分の方向へ引き寄せる動作であることが中司 2017 に引き続いて再確認された。ここから、“拿”は単に物体を手中に収めるという取得義を表すだけではなく、物体を自己の領域に収めるという意味を含む傾向にあると考えられる。

また、本調査において動きのない静的な「保持」のビデオは“拿”らしさにおいて著しく劣っていたことから、保持義は一般に“拿着”という組み合わせによって表される意味であると考えられる。ただし、本調査で「保持」のビデオがまったく選ばれなかったわけではないので、“拿”が保持義を表さないとまでは言えず、保持義は“拿”が表す周辺的意味であると解釈される。

「引き寄せ」と「引き寄せ＋移動」のビデオを比較した結果、“拿”らしさが同等であると評価したインフォーマントが半数近くいたことから、“拿”は移動義を表すと考えられる。しかし、“拿”らしさという點において、“拿”の典型動作である「引き寄せ」にとって「移動」はマイナス要素であることが本調査より明らかになった。これらの結果から、“拿”は移動義を表すものの相対的に弱く、移動義は“拿”が表す周辺的意味であると言えよう。

このように、動作動詞“拿”が表す動作の形、およびその典型性が明らかとなり、文脈や動詞の付随要素の影響をできるだけ排除して、“拿”そのものの意味を考察するための新たな方法を

提示し得たと考える。

『ビデオ評価による動作動詞の日中対照研究――“ 拿 ”と「持つ」、「取る」――』(2021)では、中心的意味および周辺的意味という観点から“ 拿 ”、「持つ」、「取る」を比較するために、中司 2019 で“ 拿 ”について行ったものと同様に、ビデオを用いた調査を日本語動詞「持つ」、「取る」について行い、その結果を“ 拿 ”と比較した。さらに、“ 拿 ”についても中司 2019 と同じ調査を別のインフォーマントに行った。これは、データの数を増やし、中司 2019 の調査結果の信頼性を検討するためである。

その結果、“ 拿 ”と「取る」の典型動作は物体を手中に収めた後、引き寄せる動作であり、取得義が中心的意味である点で共通する。両者はともに物体を自己の領域に収めるという意味を表す。また、“ 拿 ”と「取る」は周辺的意味として移動義を表す点においても共通する。一方、「取る」が完全に動的で保持義を表さないのに対し、“ 拿 ”は静的な要素も持ち合わせ、周辺的意味として保持義を表す。これらに対し、「持つ」は取得義および保持義を表す。ただし、その取得義については基本的に物体を自己の領域内に収めようとする意志は関わらない。この点において“ 拿 ”と「取る」とは異なる。また、「持つ」は移動義を表さない点においても“ 拿 ”と「取る」とは異なる。

以上のことから、“ 拿 ”は「持つ」が表すような物体を自己の領域内に収めようとする意志は関わらない取得義および保持義を周辺的意味として表すが、中心的意味から言うと、より「取る」に近い。

これまでの研究を通して、ビデオを用いた手法によって動詞が表す動作の形を明らかにすることで動詞の意味を明確にし、異なる言語間で比較することが可能になったと考えられる。

以上の成果は、論文の公刊や国際学会などでの口頭発表を行い、国民ならびに全世界に広く公開している点、または公開予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 中司梢	４．巻 ４７
２．論文標題 ビデオ評価による動作動詞の日中対照研究 ―“ 拿 ”と「持つ」、「取る」	５．発行年 2021年
３．雑誌名 中国文学研究	６．最初と最後の頁 57-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 中司　梢	４．巻 45
２．論文標題 “ 拿 ”とは何か―ビデオ評価による“ 拿 ”の中心的・周辺的意味	５．発行年 2019年
３．雑誌名 中国文学研究	６．最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計1件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 中司　梢
２．発表標題 テスト分析から見る第二外国語履修者の中国語の習得状況―麗澤大学における初級クラスを中心に
３．学会等名 中国語教育学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関